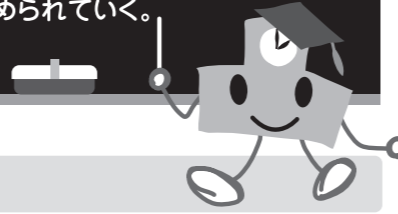


小学校の事例 西区 山の手小学校

アダプト・プログラムを組み、地域を清掃。

公共の場所を地域で引き受け、定期的、継続的に清掃活動などを行っている。年の最後には自分たちの街に対しての思いを伝える発表会を実施。地域の人々にかけられる声が自信につながり、責任意識が高められていく。



内容 アダプト・プログラムでまちづくり

本校では、6年生が区とアダプト・プログラムを組み、地域の清掃や歩道の花壇の世話に取り組んでいる。総合的な学習の時間を利用して、年7回程行っている。

アダプト・プログラムのアダプト(adopt)とは、英語で「養子縁組する」という意味。「公共の場所を地域で引き受ける」といった意味合いが含まれている。道路や公園などを公共の場所を、地域の方々、学校、企業等が、愛情を込めて、定期的・継続的に清掃などを行う活動のこと。高速道路に散乱するごみの対策に頭を悩ませていたアメリカ・テキサス州が、昭和60年に導入したのが始まりとされ、日本では、平成10年以降、約180の自治体で実施されている。道内では、平成13年5月に、札幌市西区の琴似本通地区が初めて導入した。

本校は、平成14年10月30日に地区と調印を結んだ。主な活動場所は学校前の歩道。今年度は商店街や近隣の公園の清掃にも取り組んだ。



歩道の清掃

花壇の世話は土をおこすところから始まり、1人1株の苗を植える。水やりや草取りは、授業時間以外にも放課後などを利用して行われている。活動の際は、「アダプトジャケット」と呼ばれる緑色のジャケットを着用。卒業生や地域の方で結成される「地域すくすく育み隊」や、商店街、区の振興課・土木部など、地域に関わる人々と一緒に活動することもある。取組の最後には1年間のまとめとして、地域の方も招き、学校内でフォーラム(発表会)を開催している。活動内容や、「将来、自分たちのまちがこうなってほしい」といった今後の願いを発表している。

「自分たちのまちを、自分の子どものように大切に育て、守り、よりよいまちをつくっていく」ことを目指して活動に励んでいる。



花壇の手入れ①

効果 地域の人たちの声が児童の自信に

清掃のあとは、ごみの量や種類などの分析をしている。10月に行った商店街の清掃では、40リットルのごみ袋、5袋分のごみを収集。ごみの種類は、一般ごみをはじめ、たばこの吸い殻(約30本)、弁当容器、菓子袋、ペットボトル(9本)、ビニール袋、レシートなど。使い捨ての傘(4本)も捨てられていた。

たばこなどの細かいごみは、草むらや自動販売機の裏など、隠すように捨てられている。たくさんの店が立ち並ぶ商店街には、学校前の通りと比べて、弁当容器、菓子袋、ペットボトル、ビニール袋が多い。周りの環境によって、ごみの量や種類、捨てられている場所に違いが出るということがわかった。このような分析の結果から、「ダミーカメラや、センサーで明かりがつくライトを設置すれば、物陰のごみが減るのではないか」「自分たちが清掃している姿の写真を貼ったポスターを掲示して、ポイ捨てをやめるよう呼びかけよう」など、ごみを減らすために何ができるのか意見を出し、考えるようになった。

また、活動の際、通りがかりの人から「ありがとう」「ごくろうさま」などと声をかけられることが児童の大きな励みになっている。「自分たちの活動が人の役に立っている」と自信にもなっているようだ。

清掃活動をとおして、地域を観察し、地域の人とふれあうことで、改めて地域を考えるきっかけとなっている。



花壇の手入れ②

今後 地域のために責任をもった取組を

本校のアダプト・プログラムは、「地域を知って、地域に還元する」ことを目的に活動を進めている。清掃、花壇の世話など、どの活動においても、美化の意識はもちろんだが、「地域のためにしている」「養子縁組を結んだ責任をもつ」という意識を念頭に置いて取り組むことが重要である。

将来、この地域、この学校で育ったことを誇りに思えるような、地域に根差した取組をしていきたいと考えている。



活動のまとめ

広げよう
つなげよう
環境学習の輪



実施校から
メッセージ

出前授業や課外授業など、児童の学習と結び付けることのできるイベントがあったらどんどん取り入れていきたいと考えています。1年の計画を立てたうえでイベントを取り入れるという学校が多いと思いますが、本校では、総合的な学習の時間の年間計画に余裕をもたせて計画するようにしています。そうすることにより、「あさって、外で活動したい…」という急な申し出にも対応できています。